

専門高校におけるインプット・スループット・アウトプットの連関構造

——普通科進路多様校・進学校との対比に基づいて——

本田 由紀（東京大学大学院教育学研究科教授）

◆要約

- ◎専門高校では普通科と比べて生徒の中学時成績が学習積極度に影響する度合いが弱く、授業満足度に影響される度合いはやや高い。
- ◎専門高校では学習積極度が自信および将来目標に影響する度合いは普通科と比べて弱い。
- ◎普通科進学校では地位達成的将来目標が、普通科進路多様校では「夢追い」的将来目標が、専門高校では専門的将来目標が抱かれる傾向がある。
- ◎それゆえ専門高校で授業を通じて獲得される学習積極性は高校内で閉じている傾向があるが、専門高校での教育は生徒に将来にわたる「支え」を提供する効果は認められる。

1 トラッキング構造の中での専門高校の意義とその射程

高校生を対象とする近年の研究は、高校間のトラッキング構造の維持と、高校生にとっての学力メリトクラシーおよび学校生活への関与の全般的希薄化、学校外の消費文化・若者文化の重要化という変化を明らかにしてきた（樋田ほか編 2000；尾嶋編 2001など）。こうした中で、該当年齢層の若者の9割以上を生徒として包摂する高校という教育機関が、生徒からの関与を引き出すためには、従来の学力メリトクラシーに代わるメカニズムが必要とされるようになってきている。そうしたメカニズムの1つとして、生徒にとっての教育内容そのものの意義＝レリバンスを高めるという方向性が考えられる。

特に、高校と外部社会の接続、中でも高校

から労働市場への移行という面では、90年代以降、新規高卒労働市場の量的縮小と質的劣悪化が指摘されている（日本労働研究機構 1998；本田 2005）。それゆえ、そのような労働市場を乗り切る上で必要な装備を若者に与えるために、教育の職業的レリバンスを高める必要性が提唱されている（本田 2008, 2009）。

このように、高校内部についても、高校と外部社会との接続という面からも、高校教育のレリバンスに対する社会的・研究的関心が高まりつつある。そうした関心に照らしたとき、専門高校という存在は注目に値する。日本社会における専門高校は、70年代以降、高校階層構造内での地位低下と量的比重の減少という過程をたどり、90年代に入ってからには前述のような新規高卒労働市場の変化と高卒後進学率の上昇により、いっそうその社会的機能を曖昧化させ存在感を希薄化させてきて

いるように見える。しかし専門高校は、かつてより一貫して職業的レリバンスに重点を置いた教育内容を提供してきた教育機関である。そのような教育機関が、90年代以降の急激に変化した社会経済状況下においていかなる今日的意味を持つようになっているかについて検討することは、高校教育のレリバンスという新しい課題に対して重要な示唆を与えてくれると考える。

それにもかかわらず、専門高校に正面から着目した実証研究は限定的である。それゆえ本研究では、専門高校に焦点を絞り、むしろ普通科高校のほうを比較対照群として位置づけることにより、専門高校という教育機関の特質を掘り下げて捉えることを試みる。

このような問題関心に取り組む際に、本稿では高校のインプット・スループット・アウトプットの連関構造を明らかにするというアプローチを採用する¹。ここでインプットと見なすのは、個々の高校に入学してくる生徒の特性（学力や意識など）であり、高校にとっては所与の条件という性格が強い。それに対してスループットは高校教育の内実を意味しており、個々の高校の取り組みによって一定程度独自にコントロールすることが可能である。そしてアウトプットとは、インプット・スループットを経た上で、生徒の中にいかなる教育成果が結実しているか、特に高校生活の内部に留まらずその外部にまで波及するような成果——たとえば将来にわたる進路展望や生徒の自己意識の変化——が獲得されているかどうかを意味する。このアウトプットに対しては、スループットの影響を受けるという点では高校自身が左右できる面があるが、外部社会の諸条件——労働市場の状況や社会に支配的な価値規範など——の影響力もまた大きいと、高校がアウトプットをどれほどコントロールし得るかは経験的検証が必要な事柄である。

こうしたインプット・スループット・アウトプットに関して、専門高校では普通科高校と異なる特徴が観察されるのか。専門高校の

教育にはこれらに関していかなる限界と可能性が観察されるのか。専門高校を、入学者層がほぼ同じ普通科進路多様校および入学者層を異にする普通科進路学校と対比する分析を行うことにより、これらの問いを明らかにすることを本分析の課題とする。

2 先行研究の検討

まず、高校へのインプット、すなわち高校入学者の特性に関しては、中西ら（1997）が、1960年代半ば以前と以後の高校入学者の中学時成績を学科別に比較し、専門学科入学者の中学時成績が低下していることを指摘している。より近年についても、大学進学率の上昇や高卒就職率の低下などを鑑みれば、中西らが指摘する現象は維持ないし進行していると考えられる。ただし、竹内（1995）が指摘するように、専門高校への入学者の中学時学業成績には一定の分散が見られる。

次に高校教育のスループットに関しては、まず高校に対する生徒側の意識の変化についての様々な指摘がある。学科を問わず高校生全体を扱った分析として、たとえば堀（2000）は高校生の勉強へのコミットメントが希薄化するとともに、コミットメントと実際の学習時間の関連も弱くなっていることを指摘している。大多和（2000）は、学校が生徒にとって準拠集団としての意味を低下させ、高校生文化の分化を説明する上で従来は適合的であるとされてきた「地位欲求不満モデル」が該当する度合いが下がっていることを明らかにしている。荻谷（2001）は高校生の勉強時間が近年ほど大きく減少するとともに、階層差が顕在化していることを指摘している。尾嶋編（2001）の2時点比較研究でも、これらとほぼ同様の変化が見出されている。

また専門高校を対象とした研究として、竹内（1995）は、職業高校の生徒においてフォーマルなカリキュラムへの志向は在学中に低下するものの、交友関係などを通じて生徒は高校生活を楽しんでおり、反抗や逸脱が顕在

化していないことを明らかにしている。

こうした生徒側の変化に対応する形で、高校の教師が生徒に対してとる姿勢も変化を遂げているという指摘がある。前述の竹内(1995)は、職業高校の教師が自らの役割を「知識の伝達者」から「親しい先生」へと再定義していることが、生徒の学校適応を促進していると述べている。金子(2000)も、普通科を含む高校全体の変化として、教師の対生徒パースペクティブが近年になるほど「問題視型」から生徒個人々の自律性を尊重する「許容型」へと変化し、教師生徒関係が個人同士の「親しみやすい」関係へと移行しているとともに、「授業中の逸脱」への教師の姿勢に関しては高校ランク間の差異が拡大していることを明らかにしている。また大多和・山口(2007)は、高校が行う進路指導において、学業成績や生活態度による選抜や振り分けではなく、生徒の自主性を尊重する進路支援がなされる傾向が強くなっていると指摘している。

以上の諸研究は、高校のスループットとしてフォーマルな教育内容ではなく教師生徒関係に着目しているが、フォーマルな教育内容のレリバンスに関する研究も見られる。シム(2009)は日本の上位校(普通科)と下位校(普通科・専門学科)の生徒をシンガポールの上位校(ジュニア・カレッジ)および下位校(ITE)と比較する調査を行っている。日本の下位校の中で見ると専門学科は普通科に比べて「企業や産業が求める知識を与えてくれる」「将来の職業選択のはばを広げてくれる」などを肯定する比率が高く、専門学科の教育が生徒にとって一定のレリバンスを持ち得ていることがわかる。ただし、シンガポールのITEと比較すれば日本の専門学科のレリバンスは低い。また本田(2009)も、専門高校の職業的レリバンスが相当に高いことを、主に卒業生に対する調査結果から指摘している。

そしてアウトプットに関しては、進路志望や進路意識を取り上げた研究が多い。耳塚(2000)は、2つの県の高校を上位校・中位校・専門校に3分類した上で1979年と1997年

の2時点で進路志望を比較し、上位校と中位校では四年制大学進学への収斂が、専門校では進路の多様化が生じていること、同一の学校ランクの中では家庭背景の影響が強くなっていることを指摘している。菅澤(2009)は福岡県の高校生を普通科A・普通科B・職業科に3分類して2001年と2007年の2時点で進路意識を比較し、職業科において地位達成志向や定職志向が高まっているが、普通科と比較して脱近代的職業観(フリーター志向や私生活優先志向)が高い構造は維持されていると指摘している。一方、荒川(2009)は、生徒の「興味・関心」や「将来の夢」を重視する進路指導に力を入れている中下位の「改革実施学科・コース」の生徒において、人気は高いが就ける確率の低い「ASUC (Attractive, Scarce and UnCredentialed) 職業」を志望する率が高くなっていることを見出している。

他方で、高校教育のアウトプットとして進路以外の側面に注目した研究も見られる。たとえば本田(2005)は、専門高校の生徒であることは特に男子の「対人能力」や「学校適応」を高め、「進路不安」を低下させる効果を持っていることを指摘している。

これらの先行研究の多くは、第1に、インプット・スループット・アウトプットのいずれかに特化した分析が多いこと、第2に、調査サンプル内に専門高校を含んでいる研究の多くは専門高校を下位校として位置づけており、同ランク内での普通科と専門学科を対比する分析はシム(2009)を除いてほとんど見られないこと、第3に、スループットとして高校生活のインフォーマルな側面に重点を置く分析が多く、授業などのフォーマルな教育内容のレリバンスが軽視されがちであること、第4に、アウトプットの変数として大学進学志望などの卒業時の進路選択が用いられることが多く、在学中から卒業後にまで及ぶ持続的な影響を持つような教育効果が取り上げられる例が少ないこと、などの限界を持っている。それゆえ本稿では、これらの限界を乗り越えうる分析を試みる。

3 仮説の設定

先述のように、専門高校は教育内容の職業的レリバンスという特殊性ないし利点を持つ一方で、高校階層構造の中では下位に位置づけられているという現実がある。すなわち、専門高校へのインプットとしての生徒の中学時学力は、平均的に見て高いとはいえない。しかし、今回のデータを用いた分析からは、専門高校の生徒の学習への動機づけが、同様の生徒層が入学している普通科高校と比べて高いことが明らかになっている（本報告書の第2部第2章（高木）および第3部第1章（桑田）を参照）。それゆえ、専門高校においては、インプットとは独立のフォーマルな教育内容要因（授業そのものの充実度）により、高校教育への生徒の関与が調達されている可能性がある。一方、普通科では、教育内容のレリバンスが低いゆえに、従来型のインプット（学業成績）を基準とする階層構造内での地位か、あるいは先行研究が指摘するような教師から生徒へのインフォーマルで個別的な働きかけのいずれかによって、高校教育への生徒の関与が調達されているのではないかと考えられる。これを仮説1とし、高校教育への関与の指標としては学習積極度を、教師生徒間のインフォーマルな関係の指標としては個別の進路相談を用いることにする。

しかし、専門高校における教育内容を通じた生徒の関与は、労働市場や社会の中に専門教育のレリバンスを受け止める土壌が希薄である中で、学校生活内部だけでなくそれ以外にまで広がりをもちうるアウトプットとしての教育成果にはつながっていないおそれがある。すなわち、本来は生徒のエンパワーメントにつながりうるはずの高校教育への関与が、高校生活内部のみに閉ざされたものになっているのではないかと検討する必要がある。ここではそうしたアウトプットを新谷（2004）に即して表出的・道具的という2側面に分けて把握し、前者は生徒の自信、後者は将来の目標の有無を指標として用い

る。一方、普通科では、学業達成を通じた学校生活への関与が表出的・道具的アウトプットと連結する度合いが、より高いのではないかと考えられる。これを仮説2とする。

ただし、道具的アウトプットとしての将来目標は、その有無だけではなく、どのような目標なのかにまで踏み込んで検討する必要がある。学力面で優位にある普通科進学校の場合、それに対応した地位名誉志向的将来目標が抱かれると考えられる。それに対し、学力に関しては相対的に低位であるため主に教師のインフォーマルな働きかけによって高校生活への関与が調達されている進路多様校の場合には、生徒自身の「やりたいこと」に基づく進路選択が奨励される結果、荒川（2009）が指摘するように実現可能性の高くない「夢追い」的目標が抱かれるのではないかと考えられる。そして専門高校では、目標は専門教育のレリバンスを反映したものになる傾向があると考えられる。これを仮説3とする。

以上の仮説1～3を理論仮説・作業仮説として定式化したものが以下である。また分析の基本枠組みを図1に示した。

●理論仮説1：高校のタイプに応じて、高校教育への生徒の関与の調達源は異なる。

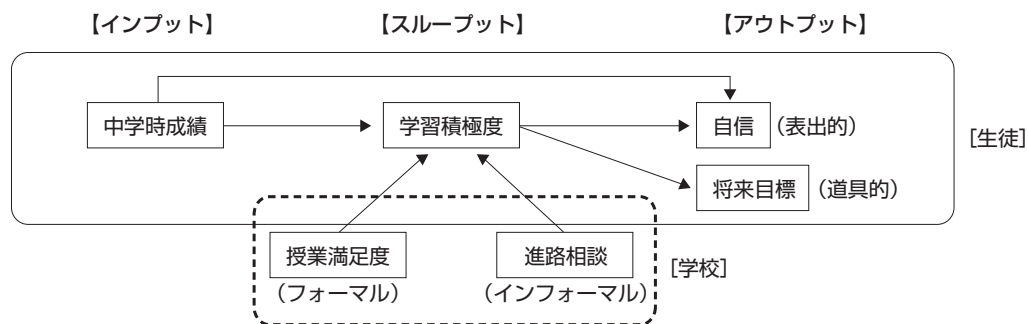
高校階層構造内で上位にある高校では、生徒のメリトクラティックな地位によって高校教育への生徒の関与が調達される。

高校階層構造内での地位も専門性も低い高校ではインフォーマルな教師生徒間関係によって高校教育への生徒の関与が調達される。

高校階層構造内での地位は低い専門性の高い高校ではフォーマルな教育内容の充実度によって高校教育への生徒の関与が調達される。

- 作業仮説1-1：普通科進学校では学習積極度が中学時成績に規定される度合いが強い。
- 作業仮説1-2：普通科進路多様校では学習積極度が進路相談に規定される度合いが強い。
- 作業仮説1-3：専門高校では学習積極度

図1 分析の基本枠組み



が授業満足度に規定される度合いが強い。

- 理論仮説2：高校のタイプに応じて、生徒の学校への関与と表出的・道具的アウトプットの連関は異なる。

高校階層構造内での地位が高い高校では、生徒のメリトクラティックな地位および高校教育への生徒の関与が表出的・道具的アウトプットに強く影響する。

高校階層構造内での地位も専門性も低い高校では、インフォーマルな教師生徒間関係および高校教育への関与が表出的・道具的アウトプットに強く影響する。

高校階層構造内での地位は低い専門性の高い高校では高校生活への生徒の関与が表出的・道具的アウトプットにつながりにくい。

- 作業仮説2-1：普通科進学校では自信および将来目標が中学時成績と学習積極度に規定される度合いが強い。
- 作業仮説2-2：普通科進路多様校では自信および将来目標が進路相談と学習積極度に規定される度合いが強い。
- 作業仮説2-3：専門高校では自信および将来目標が学習積極度によって規定される度合いが弱い。

- 理論仮説3：高校のタイプに応じて、道具的アウトプットの性格が異なる。

普通科進学校では地位達成的将来目標を

持つ生徒が多い。

普通科進路多様校では「夢追い」的将来目標を持つ生徒が多い。

専門高校では専門的将来目標を持つ生徒が多い。

- 作業仮説3-1：普通科進学校では将来目標を持つ生徒に「地位名誉志向」が強い。
- 作業仮説3-2：普通科進路多様校では将来目標を持つ生徒にASUC職業志望が多い。
- 作業仮説3-3：専門高校では将来目標を持つ生徒で専門性を重視する進路意識が強い。

4 データと変数の設定

上の仮説で示したように、本稿は専門高校と普通科進路多様校、普通科進学校を比較することを目的としている。2008年調査に普通科進学校のサンプルは含まれていないが、前年の2007年に進学校を含む都立普通科高校を対象とした調査を実施しており、両調査には共通する質問項目が盛り込まれているため、この2つの調査を統合したデータを分析では主に用いる²。ただし、統合データでは質問項目が限られるため、作業仮説3-2～3に関しては2008年調査データを用いる。

分析はすべて、専門高校を学科別に4分類し、普通科高校を進路多様校と進学校に2分類した計6タイプの高校別に行うため、データにウェイト1をかけて使用した。なお、今回調査対象とした専門高校の中で「その他の

表1 高校タイプ別の基本変数の平均値

	中学時成績	学習積極度	授業満足度	進路相談	自信	将来目標
工業科	2.23	12.56	2.52	2.14	4.26	4.97
商業科	2.33	12.70	2.43	2.16	3.83	4.98
農業科	2.10	13.04	2.59	2.35	3.75	5.16
その他の専門学科	2.93	13.52	2.58	2.37	4.12	5.41
普通科進路多様校	2.37	12.54	2.25	2.08	4.04	5.25
普通科進学校	3.97	13.36	2.56	2.17	4.37	5.50

専門学科」は、進学に重点を置いた新しいタイプの専門学科であることを付記しておく。分析で使用する変数は以下のように設定した。

- **中学時成績**：Q24の「下のほう」～「上のほう」の回答に1～5点のスコアを与えた。
- **学習積極度**：Q3のA「英語」、B「数学」、C「国語」、D「理科」、E「社会」のそれぞれについて「とても熱心」～「まったく熱心でない」の回答に4～1点のスコアを与え（それ以外は欠損値）、合計した。アルファ係数はすべての高校タイプで0.7以上を示す。
- **授業満足度**：Q7A「学校の授業に満足している」の「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」の回答に4～1点のスコアを与えた（それ以外は欠損値）。
- **進路相談**：Q48B「担任や進路指導の先生に相談する」の「とても積極的」～「まったく積極的でない」の回答に4～1点のスコアを与えた。
- **自信**：Q38のB「自分には人よりすぐれたところがある」とD「自分に自信がある」のそれぞれについて「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」の回答に4～1点のスコアを与え、合計した。アルファ係数はすべての高校タイプで0.7以上を示す。
- **将来目標**：Q38E「将来の目標がある」の「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」の回答に4～1点のスコアを

え、Q49において将来やりたい仕事は「はっきりと決まっている」～「考えたことがない」の回答に4～1点のスコアを与えたものの両者を合計した。アルファ係数は工業科で0.669、農業科で0.666であることを除けば他の高校タイプではいずれも0.7以上を示す。

- **地位名誉志向**：Q53G「社会的な地位や名誉のある人間になりたい」の「とてもそう思う」～「まったくそう思わない」の回答に4～1点のスコアを与えた。
- **ASUC職業志望**：Q49において将来やりたい仕事は「はっきりと決まっている」ないし「なんとなく決まっている」と回答した者の中で具体的な仕事の記入があるケースに対し、荒川（2009）の基準に従ってASUC職業に該当する場合を1、該当しない場合を0とした。

表1には、高校タイプ別の基本変数の平均値を示した。分散分析の結果より、すべての変数について有意水準0.1%で差があることが確認された。専門学科内部でも学科によって差が見られるが、普通科進路多様校と比較すると総じて中学時成績はやや低く、学習積極度、授業満足度、進路相談はやや高いが将来目標はやや低い。普通科進学校は中学時成績、自信、将来目標についてもっとも高い値を示している。

5 分析

5.1 スループットの規定要因

まず仮説1を検証するために、学習積極度を従属変数とし、性別ダミー（女子=1、男子=0）、中学時成績、授業満足度、進路相談を独立変数として投入した重回帰分析を高校タイプ別に行った結果を表2に示した。

表2からいえることは、第1に、専門高校の中で量的比重の大きい工業科と商業科については、中学時成績が学習積極度に影響していないということである。ただし、普通科進学校において中学時成績の影響が進路多様校よりも強いとはいえない。第2に、進路相談は農業科以外のすべての高校タイプで学習積極度に影響しているが、標準化偏回帰係数を比較すると、もっとも値が高いのは普通科進路多様校、次いで高いのは普通科進学校であり、専門学科ではこれら普通科よりも影響の度合いがやや小さくなっている。第3に、いずれの高校タイプでも授業満足度は学習積極度に強い影響を及ぼしているが、標準化偏回帰係数の値を比較すると、総じて専門学科では普通科進路多様校よりも影響の度合いが強く、工業科と農業科では普通科進学校よりもさらに強い影響が見られる。

以上から、作業仮説1-1は専門学科（工

業科・商業科）と普通科の対比という点ではあてはまるが、普通科内部の進学校と進路多様校の対比という点ではあてはまらない。また作業仮説1-2および1-3は、標準化偏回帰係数の相対的な大小という意味では支持された。

5.2 アウトプットの規定要因

仮説2を検証するために、自信および将来目標をそれぞれ従属変数とし、表2の独立変数に学習積極度を加えて高校タイプ別に重回帰分析を行った結果を表3、表4に示した。

表3からは次のことが見出される。第1に、中学時成績は農業科以外のすべての高校タイプで自信に影響しており、専門学科でも普通科と同程度以上の影響力が見られる。第2に、授業満足度は普通科の進路多様校と進学校で自信に影響しており、工業科とその他の専門学科でも弱い影響が見られるが、商業科と農業科では影響が見られない。第3に、進路相談はいずれの高校タイプでも自信に影響している。第4に、学習積極度が自信に影響する度合いは普通科進路多様校においてももっとも強く、次いで普通科進学校でも影響しているが、専門学科では工業科で弱い影響があることを除けば影響は見られない。

また表4からは次のことがいえる。第1に、

表2 学習積極度の規定要因（高校タイプ別、重回帰分析）

独立変数	工業科	商業科	農業科	その他の 専門学科	普通科 進路多様校	普通科 進学校
	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数
女子ダミー	0.006	-0.007	-0.013	-0.092	0.003	-0.064+
中学時成績	0.034	0.029	0.155*	0.238***	0.055+	0.058+
授業満足度	0.357***	0.269***	0.372***	0.295***	0.215***	0.312***
進路相談	0.167***	0.160***	0.091	0.160**	0.203***	0.198***
決定係数	0.189	0.114	0.187	0.185	0.107	0.170
調整済み決定係数	0.184	0.109	0.169	0.171	0.104	0.165
モデル適合度	p=0.000	p=0.000	p=0.000	p=0.000	p=0.000	p=0.000
N	742	741	184	243	1,058	703

注) +: p<0.10, *: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001。

中学時成績が将来目標に影響しているのは普通科進学校と工業科のみである。第2に、授業満足度が将来目標にプラスに影響しているのは普通科進学校と商業科のみであり、農業科ではむしろマイナスの影響が見られる。第3に、進路相談はすべての高校タイプで将来目標に影響しており、その影響力はむしろ専門学科のほうが普通科よりも強い。第4に、学習積極度は普通科の進学校および進路多様校と、「その他の専門学科」において将来目標に影響しているが、工業・商業・農業の各

学科では影響が見られない。

ここから、作業仮説2-1は中学時成績の影響という点ではほぼあてはまるが、自信や将来目標に対する学習積極度の影響は進学校よりもむしろ普通科進路多様校のほうが大きい。作業仮説2-2は学習積極度の影響という点ではほぼあてはまるが、進路相談の影響はむしろ普通科よりも専門学科のほうが大きい。作業仮説2-3はほぼあてはまり、専門高校では自信や将来目標に学習積極度が明確に影響しておらず、進路相談の影響が普通科

表3 自信の規定要因（高校タイプ別、重回帰分析）

独立変数	工業科	商業科	農業科	その他の 専門学科	普通科 進路多様校	普通科 進学校
	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数
女子ダミー	-0.184***	-0.101**	-0.186*	-0.098	-0.213***	-0.125**
中学時成績	0.198***	0.127***	0.080	0.214**	0.107***	0.140***
授業満足度	0.075+	0.049	-0.019	0.123+	0.072*	0.093*
進路相談	0.172***	0.140***	0.229**	0.186**	0.148***	0.078*
学習積極度	0.075+	0.010	0.042	-0.026	0.133***	0.086*
決定係数	0.114	0.052	0.104	0.094	0.125	0.072
調整済み決定係数	0.108	0.048	0.079	0.074	0.121	0.065
モデル適合度	p=0.000	p=0.000	p=0.001	p=0.000	p=0.000	p=0.000
N	738	737	183	240	1,044	688

注) +: p<0.10, *: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001。

表4 将来目標の規定要因（高校タイプ別、重回帰分析）

独立変数	工業科	商業科	農業科	その他の 専門学科	普通科 進路多様校	普通科 進学校
	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数	標準化 偏回帰係数
女子ダミー	0.105**	0.121**	0.081	0.125*	0.094**	0.071+
中学時成績	0.081*	-0.006	0.032	0.016	0.037	0.081*
授業満足度	0.011	0.084*	-0.159*	0.072	0.017	0.042*
進路相談	0.241***	0.280***	0.417***	0.376***	0.177***	0.146***
学習積極度	0.028	0.022	0.114	0.125**	0.094**	0.086*
決定係数	0.096	0.110	0.204	0.184	0.066	0.064
調整済み決定係数	0.090	0.104	0.181	0.167	0.061	0.057
モデル適合度	p=0.000	p=0.000	p=0.000	p=0.000	p=0.000	p=0.000
N	718	711	180	237	1,017	684

注) +: p<0.10, *: p<0.05, **: p<0.01, ***: p<0.001。

表5 「地位名誉志向」×「高校タイプ」×「将来の目標」

		地位名誉志向		Q38E × Q1B × Q53G	
将来の目標	高校タイプ (6分類)	強い	弱い	合計	N
		ある	工業科 (%)		
	商業科 (%)	35.0	65.0	100.0	(363)
	農業科 (%)	32.1	67.9	100.0	(106)
	その他の専門学科 (%)	44.2	55.8	100.0	(242)
	普通科進路多様校 (%)	43.3	56.7	100.0	(644)
	普通科進学校 (%)	52.6	47.4	100.0	(437)
0.1%水準で有意 p=0.000					
ない	工業科 (%)	29.8	70.2	100.0	(436)
	商業科 (%)	32.3	67.7	100.0	(393)
	農業科 (%)	15.3	84.7	100.0	(98)
	その他の専門学科 (%)	26.3	73.8	100.0	(160)
	普通科進路多様校 (%)	30.6	69.4	100.0	(516)
	普通科進学校 (%)	48.0	52.0	100.0	(275)
0.1%水準で有意 p=0.000					

と比べてもやや大きい。

5.3 将来目標の性格

つづいて、将来目標の中身を高校タイプ別に比較するために、まず作業仮説3-1に関して、Q38Eにおける将来の目標の有無別に、地位名誉志向と高校タイプとのクロス集計を行った結果が表5である。表5より、将来の目標の有無にかかわらず、普通科進学校では地位名誉志向が強い者が多いことがわかる。

次に、作業仮説3-2を検証するため、2008年データを用いて、Q49で職業志望の自由記述に回答がある者のみを取り出し、記載された職業がASUC職業であるか否かと高校タイプの関係を将来の目標の有無別にクロス集計を行った結果が表6である³。2008年データには普通科進学校が含まれていないため、高校タイプは普通科進学校を除く5分類となる。

表6より、将来の目標がある者において、普通科進路多様校ではASUC職業を志望している者の比率が高くなっていることがわかる。ちなみに、表は割愛するが、将来の目標

がある者のみについて、男女別に表6と同様の分析を行うと、男子において普通科進路多様校でASUC職業志望が多くなっており、女子では有意差は見出されなかった。

最後に、作業仮説3-3を検証するため、2008年調査票において専門高校の生徒のみを対象とする質問の中からQ19A「専門教科で得た知識や技術が今後の人生の大きな支えになると思う」(以下、「専門が支え」と略記)およびQ19C「今学んでいる専門教科の知識や技術を活かさない職業にはつきたくない」(以下、「専門を活かす」と略記)のそれぞれに対する回答と、将来の目標の有無との関係を見るクロス集計を行った(表は割愛)。その結果、「専門が支え」を肯定する比率は、将来の目標がある者で85.0%、将来の目標がない者で74.1%(ガンマ係数0.328、0.1%水準で有意、p=0.000)であり、また「専門を活かす」を肯定する比率は、将来目標がある者で53.4%、将来目標がない者で41.9%(ガンマ係数0.227、0.1%水準で有意、p=0.000)と、いずれも将来の目標がある者において有意に

表6 「ASUC職業志望」×「高校タイプ」×「将来の目標」(職業志望の記述がある者)

Q49 × Q1B × Q53G

将来の目標	高校タイプ (5分類)	ASUC職業志望		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
ある	工業科 (%)	13.4	86.6	100.0	(247)
	商業科 (%)	13.9	86.1	100.0	(137)
	農業科 (%)	18.1	81.9	100.0	(72)
	その他の専門学科 (%)	15.7	84.3	100.0	(140)
	普通科進路多様校 (%)	26.2	73.8	100.0	(145)
5%水準で有意 p=0.015					
ない	工業科 (%)	20.5	79.5	100.0	(44)
	商業科 (%)	3.3	96.7	100.0	(30)
	農業科 (%)	10.5	89.5	100.0	(19)
	その他の専門学科 (%)	0.0	100.0	100.0	(14)
	普通科進路多様校 (%)	19.0	81.0	100.0	(21)
Nが小さいため検定は適用せず					

多い。ここから、専門高校における将来の目標とは、専門性と関連したものであるといえる。

6 知見と考察

以上の分析結果から得られた知見を、高校タイプ別に模式的に示したものが図2である。特に専門高校の特徴を述べるならば、専門高校(特に工業科・商業科)ではインプットとしての中学時成績に影響されることなく、フォーマルな教育内容(授業満足度)とインフォーマルな教師生徒関係(進路相談)を通じて学習積極度というスループットが調達されているが、その学習積極度はアウトプットとしての自信や将来目標には明確な影響を及ぼしていない。これらのアウトプットはむしろ、中学時成績というインプットや、インフォーマルな教師生徒関係によって規定されている。

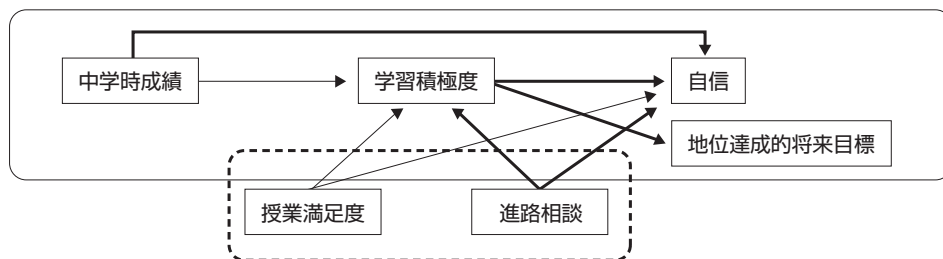
このような専門高校の特徴は、インプット・スループット・アウトプット間の連関がより緊密である普通科の進学校や進路多様校

とは異なり、授業の満足度を高めることで得られた生徒の高校教育への関与が、専門高校内部に閉ざされたものとなっていることを示唆している。これは、高校階層構造内で専門高校が相対的に下位に位置づいているという現実や、高校における専門教育の内容を明示的に尊重・評価することの少ない労働市場や社会全般の状況がある中で、せつかくレリバンスの高い教育内容を専門高校が提供しているにもかかわらず、その成果が限定されてしまっていることを意味しているものと解釈される。

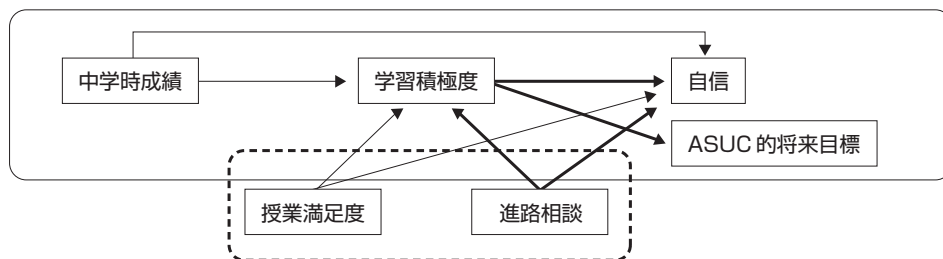
ただし、このような知見は、専門高校と普通科高校を同一の基本枠組みで比較しようとしたため、使用できる質問項目が相当に限定されるという制約条件のもとでの分析結果であることには留意が必要である。作業仮説3-3の分析結果に表れているように、専門高校の実態をよりきめ細かく捉え得る質問項目を用いた場合、専門高校の姿はやや異なって見えてくる。特に、「専門教科で得た知識や技術が今後の人生の大きな支えになると思う」と

図2 高校タイプ別の分析結果の模式図

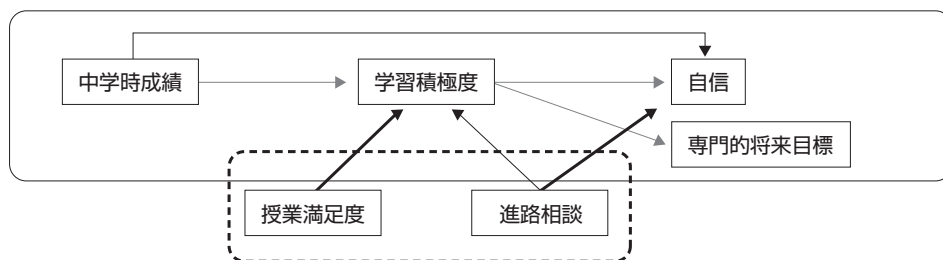
〈普通科進学校〉



〈普通科進路多様校〉



〈専門高校〉



いう項目を専門高校の生徒の約8割が肯定していることは、注目に値する⁴。今回の分析では、「将来目標」という先鋭化・焦点化された指標で道具的アウトプットを表したが、それに代えて「支え」という、将来にわたり一定の汎用性のある柔軟な基盤という形で道具的アウトプット（あるいは「職業的レリバン

ス」）を把握し直すならば、専門高校はきわめて高い比率の生徒に対してそれを提供し得ている。不安定性・流動性の高い経済社会状況のもとでは、そのような「支え」としての教育成果こそが、高い地位への志向や「夢追い」と比べても、はるかに有益なものであるのかもしれない。

〈注〉

- 1 インプット・スループット・アウトプットという見方については菊谷（1981）を参照。
- 2 データの概要は以下の通り。高校数は2008年データの20校と2007年データの普通科高校9校を合わせた29校で、総サンプル数は4,378名。普通科高校12校は四年制大学進学希望率に基づいて普通科進路多様校8校と普通科進学校4校に分類した。2007年データについての詳細はBenesse教育研究開発センター（2009）を参照。
- 3 なお、2008年調査対象校の中で、工業高校の1校はデザインや美術に特化した教育を行っている。荒川（2009）のASUC職リストには「デザイナー」が含まれているが、この工業高校では「デザイナー」は実現可能性の高い職業であり、ASUC職であるとは必ずしもいえない。それゆえ、表6の分析ではこの工業高校の生徒をサンプルから除外している。
- 4 この項目に焦点を当てた分析を行った福本（2009）は、「専門性が支え」という意識を持つことが、学校適応や生活全般の充実、そして専門以外のことへの学習意欲など、様々な望ましい意識とつながっていることを明らかにしている。

〈引用文献〉

- 荒川葉、2009、『「夢追い」型進路形成の功罪』東信堂。
- 新谷周平、2004、「フリーター選択プロセスにおける道具的機能と表出的機能」『社会科学研究』55: 51-78。
- Benesse教育研究開発センター、2009、『都立高校生生活・行動・意識に関する調査報告書』（株）ベネッセコーポレーション。
- 福本一威、2009、「アイデンティティとしての専門性が専門高校生にもたらす作用」『都立高校生に関する調査報告書——専門高校に着目して』東京大学教育学部比較教育社会学コース、150-59。
- 樋田大二郎ほか編、2000、『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
- 本田由紀、2005、『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版。
- 、2008、『軋む社会』双風舎。
- 、2009、「専門高校生の職業への移行」小杉礼子編『若者の働きかた』ミネルヴァ書房、46-73。
- 堀健志、2000、「学業へのコミットメント」樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、165-83。
- 金子真理子、2000、「教師の対生徒パースペクティブの変容と『教育』の再定義」樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、123-48。
- 菊谷剛彦、1981、「学校組織の存立メカニズムに関する研究」『教育社会学研究』36: 63-73。
- 、2001、『階層化日本と教育危機』有信堂高文社。
- 耳塚寛明、2000、「進路選択の構造と変容」樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、65-82。
- 中西祐子・中村高康・大内裕和、1997、「戦後日本の高校間格差成立過程と社会階層」『教育社会学研究』60: 61-82。
- 日本労働研究機構、1998、『新規高卒労働市場の変化と職業への移行の支援』調査研究報告書No.114。
- 尾嶋史章編、2001、『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房。
- 大多和直樹、2000、「生徒文化—学校適応」樋田大二郎ほか編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、185-213。
- 大多和直樹・山口毅、2007、「進路選択と支援」本田由紀編『若者の労働と生活世界』大月書店、149-84。
- シム・チュン・キャット、2009、『シンガポールの教育とメリトクラシーに関する比較社会学的研究』東洋館出版社。
- 菅澤貴之、2009、「地位達成志向の変容」友枝敏雄編『現代の高校生は何を考えているか』世界思想社、87-114。
- 竹内洋、1995、『日本のメリトクラシー』東京大学出版会。